

生涯教育研修活動報告書

病理検査研究班

- 1 実施日時：2023年5月11日 18時00分～19時00分
- 2 会場：Web開催 科目・点数：専門－20点
- 3 主 題：薄切の知識を深めよう ～基礎からトラブルシューティングまで～
- 4 講師：末吉 徳芳（サクラファインテックジャパン株式会社）
小島 朋子（自治医科大学附属さいたま医療センター）
- 5 協賛：なし
- 6 参加人数：会員290名 賛助会員0名 非会員1名
- 7 出席した研究班班員：関口久男、森田繁、高橋俊介、小島朋子、細沼佑介、今村尚貴、
遠山人成、松本祐弥、三鍋慎也
- 8 研修内容の概要・感想など
今回は「薄切の知識を深めよう ～基礎からトラブルシューティングまで～」をテーマに開催した。
末吉氏は「薄切のコツとポイント」と題して、薄切におけるパラフィンの使い分けや、マイクロトームの構造、替刃の特徴に至るまで解説した。病理診断において病理標本作製は根幹となる部分であり、薄切は顕微鏡観察に耐えうる薄さで切ることが肝要となる。パラフィンは組織片を薄く切るために硬度を与えるものであり、その性状は融点、針入度、粘度によって異なっており、最適な薄切を行うために性状の異なるものを混合することも良く、末吉氏はパラフィンワックス140と115を混合しているとのことであった。替刃について刃角度の小さいものは逃げ角を小さくすることができるため、薄い切片を作ることに適しているが、耐久性に乏しい。一方、刃角度の大きいものは、耐久性がありたくさんのブロックを薄切する業務において有用であるとのことであった。
小島氏は「薄切時のトラブルと対処法」と題して、初心者に起こりやすいトラブルと原因、対策について、また、薄切技術の向上について解説した。面出し時に鏡面にならず、白っぽく毛羽立ったようになる場合の原因として、固定不良、パラフィン浸透不足、荒削りの切削厚が大きすぎる・早すぎる等が考えられる。対策としては、まずこれらの原因を取り除くことであり、追加として刃を交換する、加湿する等の工夫も有効とのことであ

った。薄切技術の向上の一助として、薄切スピードを数値化（可視化）することが大切であり、 $(\text{薄切ブロック数}) / (\text{要した時間})$ から単位時間当たりの薄切数を算出、グラフ化することで、モチベーションの維持や達成度、課題等がみえてくることのであった。

今回の研修会が、病理検査を始めて間もない方にとって日常業務の参考になること、また、新人職員を教育する立場の方にとって基本の再確認となれば幸いである。

提出日 ; 2023 年 5 月 11 日

文責 : 三鍋慎也